2011 年 12 月 18 日　西福岡教会説教　　中川憲次

題：　　「忍耐は実る」

聖書箇所：　ローマの信徒への手紙 **5** 章 **1** 節－**7** 節

「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。私たちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。この希望は私たちを欺くことがありません。」

本日の聖書の言葉は、「苦難をも誇り」とすると申します。「苦難をも」と言うのですから、普通は苦難以外のものを誇りとするのが当然だということが、前提されています。しかし、それはさておき、ここでは特別に苦難をも誇りとする、というのです。誰もが嫌がる苦難などというものを、喜んで誇りとする、などというのはまことにおかしなことです。それ故に、なぜ苦難を誇りとするのかの理由が次に語られます。それは何故かというと、「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」からだというのです。すなわち、苦難は希望に繋がるから、誇りとするに足るというのです。では、何故そうなるのかということを、少し分析的に見てみましょう。

まず、苦難と訳された元のギリシャ語は、トリプシスという言葉です。トリプシスとは、もともとは圧迫するという意味を持っている言葉です。だから英語では、**oppression** と訳されたりもします。上から押さえつける、すなわち圧迫するという意味です。苦難とはまさに私たちの上にのしかかってきて、私たちを押しつぶそうとするものです。そのような圧迫する苦難が忍耐を生むといいます。忍耐と訳されたギリシャ語は、ヒュポモネーです。このギリシャ語はもともと「下に留まる」という意味を持っています。ですから、苦難が私たちを押しつぶそうと襲い掛かってきたとき、私たちがその圧迫の下に留まって、その苦難を堂々と受け止めれば、苦難は忍耐を生み出したということになります。その圧迫の下に留まらずに逃げてしまえば、苦難は逃避を生み出したということになります。

そして、私たちを押しつぶそうとして襲い掛かってくる苦難を堂々と受け止めると、練達が生み出されるといいます。練達と訳されたギリシャ語は、ドキメーです。ドキメーは英語では **experience** と訳されたり **chracter** と訳されたりします。経験とか品性という意味でしょう。襲い掛かってくる苦難をしっかりと受け止めて耐え忍んだ人は、自ずからその品性が養われるというのでしょう。そして立派な品性が養われれば、私たちには希望があります。

立派な品性が養われたかどうかは、何でわかるのでしょうか。それは、私たちの表現活動でわかります。すなわち、私たちがどのように話したり、歌ったり、描いたり、歩いたり、走ったり、しているかを見ればわかります。私たちを押しつぶそうとして襲い掛かってくる苦難を私たちがしっかり受け止めれば、私たちの表現は違ってくるはずです。そこに希望があります。

そこで表現という英語を思い出していただきたいと思います。これから申すことは、文芸評論家の小林秀雄が何かの本で書いていたことです。表現を意味する英語は **expression** です。**expression** という英語は、**ex** と **pression** に分けることができます。 **ex** はエクステリアーなどという言葉からわかるように「何々から外へ」という感じの前綴りです。そして、**pression** は圧迫を意味します。このように分析するとよくわかるのですが、イクスプ

レッションとは、表現を意味するのではありますが、その内実は実に深い意味を持っています。すなわち私たちが上から押しつぶそうとする力をまともに受け止めるとき、押しつぶされたグレープフルーツかジューッとジュースを出すように、私たちの中からにじみ出てくるもの、それが品性のある表現です。

時々、年配の男の人や女の人が苦労話のコンクールをしているかのようなところに居合わすことがあります。それを聞いていると、この世の苦労はその場に全て集まってきたように思えるほどです。一人がある苦労話をすると、それを聞いていた別の人がもっとすごい苦労話をいたします。その話が終わるか終わらないうちに、その話のお尻を蹴飛ばすようにして、また別の一人がもっとものすごい苦労話をするのです。もはや、その場の人々は、人の話なんか聞いていません。次にしゃべることばかりを考えています。その様子を見ていると、とてもその場の人々が苦労を受け止めて品性を養った人には思えません。苦労話をトクトクとしている人などというものは、そのこと自体で、自分がいかにきちんと苦難の圧迫を受け止めていなかったかということを自ら証明しているようなものです。俗に言う、苦労が身についていない状態です。苦労が身についていない人の品性は卑しいのです。そんな人は、あらゆる表現活動において、お粗末極まりない人生を送ることになります。

さて、私たちは物事が順調に進んで当然と思いがちです。そして、調子の良いときは、ニコニコと機嫌よく生きています。しかし、ひとたびうまく物事が進まなくなると、機嫌が悪くなります。そのような状況を人生の危機と言ってもよいでしょう。皆さんは危機に強いでしょうか。私は、危機に弱いと告白せざるを得ません。しかし実は、危機こそ、人生の正念場です。危機から逃げずに、その状況を堂々と受け止め続ければ、私たちの表現活動は実に意味の深いものなり、私たちの人生は希望に満ちたものになります。そのよう意味で、お互いに危機を喜び誇るようになりたいものです。

ところで、今やこの西福岡教会そのものが苦難の直中にあります。私は今年の 4 月から御教会を応援させていただいております。本当に心が痛みます。しかし、この苦難の時、その苦しみを受け止めて、じっと耐え忍ぶなら、神様がそれにふさわしく報いてくださいます。私たちが望むのは神様に良しとされることだけです。

私たちは悪魔に負けてはなりません。悪魔の業には一つの特徴があります。それはなんでしょうか。それは私たちを常に分裂させようとするということです。私たちが仲良く力を合わせようとしていると、悪魔はそれを分裂させようとします。ですから、その悪魔の業に負けずに、力を合わせましょう。私は、この苦難の時に、皆様がこうして力を合わせて礼拝を捧げ、礼拝後には力を合わせて食事を用意してみんなで楽しく愛餐の時を持っておられることを、心からうれしく思っています。

皆様の今この時の忍耐は、きっと豊かに実ります。最後にイエス様の約束の言葉をお読みします.マルコによる福音書 4 章 30 節以下 32 節までに曰く、

「更に、イエスは言われた。『神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る』」

つまむことさえ出来ないようなちっぽけなからし種が、「空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る」ほど大きく育つのです。今、この教会が置かれている状況はそのからし種のような状況です。この大変な状況の中にやがて来るであろう実りを見て、信じて、忍耐しましょう。

祈り　神様、私たちを押しつぶそうとして襲いかかってくる苦難から逃げ出すことのないように、その苦難を、このアドベントの時私たちに向って突進してくださっているイエス･キリストにあって堂々と受け止めることができるように私たちを導いてください。この祈り、主イエス・キリストの御名によってみ前におささげいたします。アーメン。